

ツアー参加者	ガイド	アミューズトラベル社のトムラウシ山ツアーという受け皿に集まった19人。①ツアー会社があり、②ガイドがいて、③客がいて、成立する。	gmガイド(北海道32歳・アミューズトラベル社の札幌営業所スタッフ)→3年前から夏だけの契約社員、gsガイド(愛知38歳・アミューズトラベル社の名古屋の専任ガイド&スタッフ)→アミューズトラベルと契約を交わした専任ガイド&スタッフ、glガイド(広島61歳・アミューズトラベル社の広島の専任ガイド&スタッフ)→アミューズトラベルと契約を交わした専任ガイド&スタッフ、シェルバ(ネパール60歳・アミューズトラベル社のネパール・ホムズ・オフィススタッフ)
	ツアー客		m52(65歳) f55(68歳) m51(64歳) f54(64歳) m53(61歳) f41(55歳) m21(69歳) f23(61歳) m31(66歳) f11(68歳) f32(62歳) f33(69歳) f34(64歳) f22(62歳) f24(59歳)

※年齢は2009年7月時点のもの

日にち	行動の時刻・場所	天気	パーティーの行動	ツアー客などの言葉(取材時のもの、紙面報道より)
7月13日(月)	13時30分 新千歳空港→登山用品店→コンビニ		中部、広島、仙台など各飛行場から新千歳空港に集合。ツアー客とガイドたちはバスで旭岳温泉に出発する。バスの中ではガイド2人が話す。gmガイドが行程の説明、glガイドが郵送する荷物の案内などをする。glガイドは「北海道は初めて」と話す。それを聞いたgsガイドが驚く(guideも北海道は初めて)。参加者の自己紹介などはない。途中でアウトドア用品店、コンビニに立ち寄り、ガスボンベ、行動食など山中での食糧を買い足す。	■ツアー参加者たちと話して、調べて気づいたこと それぞれ小屋の中などでは、山や高山植物の話などをみな楽しく過ごしたが、自己紹介もなく、お互いの名前をたずねあつてまで会話をしていないため、お互いの名前を知らない。事故後に新聞報道などを見て名前を知る。ガイドもツアー客全員の名前を覚えてはいなかったという。
	17時00分前 旭岳温泉白樺荘		旭岳温泉白樺荘に到着。下山場所のトムラウシ温泉に送る荷物をツアー客から集めて宅配便で発送(エスケープなどで下山場所が変わると回収に時間や手間がかかる)したり、共同装備をガイド4人で振り分ける。gmガイドは、テレビの天気予報を見て、明日14日の天候は良いが、15、16日は崩れるだろうと予想する。	
7月14日(火)	6時00分前 旭岳温泉白樺荘→旭岳ロープウェイ駅	おおむね晴れ	上川管内東川町旭岳温泉の白樺荘を6時前に出て、6時10分頃旭岳ロープウェイ駅に到着。ロープウェイに乗りして姿見駅へあがる。	■14日の天候の印象。何を着て歩いたか ●m52/晴れていたが、遠くの山にガスがかかり、時々山頂が見えるような天気。普段は春夏用の長そでシャツ(モンベルのジオライン3D・ポリ100%)のみ。この日はゴアの雨具の上を着用。下は、トランクス、サポートタイツ(CWX)、登山用ズボン。●f54/晴れていたが肌寒く、普段は長そで1枚(ノースフェイスのジップアップ式シャツ・ポリ100%)で歩くが、防寒着の1つに持参した薄手のジャンパー(夫のお古のゴルフ用ウインドブレーカー)をはおって行動した。下は、登山用ズボン、サポートタイツ(CWX)。●f41/晴れていたが肌寒いので雨具をはおった。着ていたのは、山用の長そでハイネックシャツ(ポリ97%、ナイロン3%)の上に半そでのTシャツ(ポリ100%)。下は、登山用ズボン(ナイロン、アクリル、ポリウレタン、毛)、サポートタイツ(CWX)。下着も山用のもの。行動中はTシャツの脱ぎ着で温度を調節している。
	6時30分頃 姿見駅→旭岳への登山道	おおむね晴れ/風/5~6合目付近はまっすぐに歩きづらい	体操をして、ガイド3人、シェルバ1人、ツアー客15人の計19人で歩き出す。旭岳までは風があり、とくに5、6合目付近の約30分間は、風に体がもっていかれてまっすぐに歩きづらいほどの風。	●m52/晴れているかも。ひざ下丈のゴアのスパッツも使用。●f54/登山店で買ったゴアの雨具上下。長期山行では、いつも夫のLLサイズを持参。そでが長いから雨が降っても手がすっぽり覆えるため冷えを防げる。それでも今回は下山したら左手がしもやけになっていた。雨の日はいつも雨具の下の登山用ズボンが濡れないように裾をまくり上げているので、トムラウシの日も朝からズボンの裾をまくっていた。前日のヒサゴ沼に向かった雨の日は、登山用ズボンを濡らしたくなかったため、スポーツタイツの上に直に雨具をはいて歩いていた。●f41/登山店で買ったゴアの雨具上下。購入して3年目くらい。専用の洗剤と防水機能を持つニクワックスを時々使用。ひざ下丈のゴアのスパッツも使用した。
	9時00分 旭岳山頂	晴れ/遠くの山には雲風/山頂に近づくと弱まる。肌寒く感じる風。	旭岳山頂に近づくと風は弱まる。天気は良かったが、遠くの山の頂には雲がかかっており、トムラウシ山頂は雲の切れ間に時々見えた。風があり肌寒く、雨具の上着を着用している人がほとんどだった。休憩時、gmガイドは山頂からの下降ルート(雪渓)の状態を偵察する。	
	旭岳の下り→間宮岳	晴れ/遠くの山には雲風/雨具を着て歩くくらい肌寒い。	旭岳の下りで、女性客f23が体調が悪く吐く。彼女は普段から標高1700mに達すると胃に不快感が起こり、高山病の症状が出、初日は固形物が食べられず、水も吐いてしまうという。男性客m51は、何度か一緒になったツアーで同じ状況を見ているため、「またやっているな」と思ったくらいだったという。そのようなことがあっても、パーティーの歩くペースは順調であったという。間宮岳手前の岩陰で昼食をとる。	■雨具について ●m52/登山店で買ったゴアの雨具上下で3年ほど経過。防水性は少し弱くなっているかも。ひざ下丈のゴアのスパッツも使用。●f54/登山店で買ったゴアの雨具上下。長期山行では、いつも夫のLLサイズを持参。そでが長いから雨が降っても手がすっぽり覆えるため冷えを防げる。それでも今回は下山したら左手がしもやけになっていた。雨の日はいつも雨具の下の登山用ズボンが濡れないように裾をまくり上げているので、トムラウシの日も朝からズボンの裾をまくっていた。前日のヒサゴ沼に向かった雨の日は、登山用ズボンを濡らしたくなかったため、スポーツタイツの上に直に雨具をはいて歩いていた。●f41/登山店で買ったゴアの雨具上下。購入して3年目くらい。専用の洗剤と防水機能を持つニクワックスを時々使用。ひざ下丈のゴアのスパッツも使用した。
	北海岳→白雲岳分岐→白雲岳往復	晴れ/遠くの山には雲風/旭岳のほうに風が強いが、雨具を着ている	北海岳を経由し白雲岳分岐点へ。分岐からは、gmガイドとglガイドの案内のもと、ツアー客は白雲岳山頂を往復する。gsガイドとシェルバは夕食サービス(お湯の提供のことらしい)のため、白雲岳避難小屋に先行、女性客f23も白雲岳には登らずにひと足先に小屋へ行った模様。	
	14時30分頃 白雲岳避難小屋着	晴れ	白雲岳避難小屋に到着。glガイドとgmガイドが管理人に挨拶、1階を使うことになる。gsガイドは湯をひたすら沸かし、ツアー客に夕食と翌日分の湯を渡す。その湯で夕食や翌日の朝食を作る。体調のすぐれなかった女性客f23はほとんど食べられず、スープとお茶だけを摂る。男性客m52が17時頃に外のベンチで夕飯をとっていたときは雨の気配はない。夕食後、ガイド3人で翌日の打ち合わせをする。gmガイドは、携帯電話の天気サイトで上川地方の天気図を確認。翌日の午後(午後)に寒冷前線が通過して雷の心配があるとして出発時間を30分早める。消灯時間はとくになかったが、18時過ぎには就寝がはじまる。夜のうちに朝食を作っておくよう指示がある。 ※白雲岳避難小屋は「避難小屋」という名だがシーズンは管理人常駐、素泊まり1人1000円、幕営(テント)費300円。 雨が降り始める。	
出発6時30分とすると、小屋まで8時間の行動	夜中	雨		

7月15日 (水)	3時～3時30分頃 白雲岳避難小屋	雨／しとしと雨。	起床時間前の3時頃からごそごそと動き出した女性客がいて、各自バラバラと起きはじめる。前夜に作った冷たくなった朝食を食べる。ツアー客から体調が悪いという申し出はなかったが、女性客f23は、朝もスープとお茶だけだったようだ。出発前、起床時間を守るようにとgガイドから注意がある。	<p>■15日の天気の影響</p> <p>●m52／強く降ることはなかったが、全身がくまなく濡れる雨で、霧雨のような雨。メガネの外側に水滴がつき、内側は曇った。小川のような登山道で靴がグズグズに濡れた。●f54／ザンザン降りではなく、細かな雨粒のしとしと雨。全身びしょ濡れ。水滴と曇ったメガネに足場がよく見えず、歩きにくかった。●f41／苦にはならない程度の雨で、視界があった。振り返ると時々旭岳の山腹がガスの合間に見えたりもした。</p>
	5時00分過ぎ 白雲岳避難小屋→ 高根ヶ原→忠別岳 →五色岳	雨／霧雨のような細かな雨。全身がくまなく濡れるようなしとしと雨。五色岳付近では登山道にかかるハイマツの水滴でも濡れる。 風／ほとんどなく、体感温度はそれほど低くはなかった。	全員雨具上下を着て出発。苦にはならない程度の雨。風はほとんどなく、寒さを感じることはない。忠別岳、五色岳の山頂を経由し、化雲岳は登らずに巻いてヒサゴ沼避難小屋に降りる。土が流されて深く掘れてしまった登山道は水溜まりが多く、通過では登山靴のかかとから水が入ったところも。足が冷えていくことで疲れがたまり、ぬかるんでいる道では歩きにくかった。道をはずれる客も数人いたが、gsガイドは怒鳴ったという。『道を選んで歩くので時間がかかる。ペースは遅いが、休憩時間を短めにしたので15時前には小屋に到着』(8月7日アミューズ「トムラウシ山の遭難事故の経過について」より)。『体が冷えないように休憩は5分程度にとどめ、ほとんど立ち休みで進む』(「中間報告書」より)。また、女性客f23はこの日も行動中に嘔吐していた。 ※五色岳付近では登山道をおおうハイマツに朝露や夜露がおりた日は、衣類がかなり濡れるので雨具を着用したほうがいい場所なので雨で濡れていたとしたらかなりの水分がまとわりついたと推測される。	<p>■15日 雨天の行動で衣服や荷物は濡れたか</p> <p>●m52／下着までびしょ濡れ。靴も。靴下はしぼれるほど。サポートタイツも脱ぎ、下着まですべて着替えたが、「着干しする」といっていた人もいた。シュラフが半分ほど濡れた。靴の中に新聞紙を入れた。●f54／袖口や襟から雨が進入するのは全身濡れ、靴下もしぼった。女性はお互いに目隠しをして着替えた。私は下着以外を全部着替えたが、その後下着も脱げばよかったと後悔した。ザックの底に入れた防寒着のフリース(中厚手)が行動中に濡れてしまった。●f41／シャツとサポートタイツは濡れたが下着は湿った程度。上半身全部着替え、サポートタイツももう一枚に履き替えた。靴と靴下は濡れたので、靴下は履き替え、靴には新聞紙を入れ、一度取り替えたら朝は少し湿っている程度に。ザックの中の荷物は袋に入れていたので濡れなかった。濡れないように石畳いに歩いたり、登山道の横を歩いたりしていたが、だんだんそれどころではなくなってきてバシャバシャと水の中を歩いた。靴の中に水が入るとドツと疲れる。これがだいぶこたえた。●m51／雨具の下はちょっと湿った程度でびしょ濡れにはならなかった。登山道の水の中をじゃぶじゃぶ歩いたことによる体力消耗が著しかった。足からの冷えが一番こたえた。私以上にこたえた人はたくさんいるはず。</p>
出発5時 00分なので、 小屋 まで10時 間弱の行 動	15時00分前 ヒサゴ沼避難小屋	雨／日中ととくに変わりはない。 風／	ヒサゴ沼避難小屋に到着。歩くペースがあがらず時間がかかった雨の日の行動であったが、アミューズ社パンフレット記載の行動予定時間よりも若干早く避難小屋に着く。2階には静岡の6人パーティーと、旭岳に北上予定の夫婦連れがいたため、ツアー一行は1階を使用する。1階の床は濡れていた。避難小屋に到着した後は、着替えたり、濡れたものを干したりと忙しく過ごす。荷物のパッキングが悪く、防寒着やシュラフなどの荷物を濡らしてしまった人もいた。また、この日の行動で、ほとんどの人の靴が中まで濡れた。雨具、スパッツ、手袋、靴下、着ていた衣服、タオルなどがロープ等に干されたが、乾くことはほとんどなかった。男性客m31など「着干しする」人もいた。	<p>■小屋到着後の印象や行ったことなど</p> <p>●f54／この日は展望もなく、泥んこ道を長時間歩いたため、皆さんへろへろだったようだ。●m52／濡れたものはタオルや新聞紙を使って少しでも水気をしぼるようにした。</p> <p>※着干し→一般的に着たまま乾かすことを「着干し」というが、女性客f54は『サポートタイツは脱いでシュラフの中で着干した。gガイドが着干しを教えてくれた』と話している(中間報告書)。では男性客m31のいう「着干し」とは…</p>
	17時00分頃	雨／日中と変わらず。 風／	ガイドの沸かした湯で各自が持参したインスタント食品などの夕食を作って食べる。初日に体調のすぐれなかった女性客f23は、夕食に雑炊とクルミパンを半分、紅茶を飲む。行動中には行動食も少し食べられた。gガイドとgmガイドが翌朝通過する雪渓の状態をチェックする(中間報告書より。その頃の天気は?)。翌日の天気についてgmガイドは、前日の天気予報をもとに、明日は午前中までは崩れるが午後からは大丈夫と予想する(8月7日アミューズ「トムラウシ山の遭難事故の経過について」より。「中間報告書」には天気予報の情報をいつ入手しどう判断したのか記述なし)。ガイドたちはヒサゴ沼避難小屋で翌日の天気予報の情報を得ていない。	<p>■眠れたか</p> <p>●m52／買い物用ビニール袋にパッキングしたシュラフが半分ほど濡れたので、持っていたシュラフカバーを濡れたシュラフの中に入れた。全身着替えたこともあり、ぐっすり寝られた。一度目が覚めた2時頃、風がすごかった。「深夜2時頃にトイレに行くと、風も雨も激しかった」とm31から聞いた。●f54／シュラフは濡れていなかった。全身用エアマットを敷いて寝た。靴下の替えがなく素足で寝たが熟睡できた(山ではいつも睡眠導入剤使用)。1階は狭く、2階で寝てもいいといわれて2階で寝た。暖気が上がっていたためか暖かかった。●f41／シュラフは濡れていないが、床が濡れていたのと窓からの吹き込みでよくは眠れず、前日のほうが眠れた。今回は避難小屋泊まりなので、快適には眠れないだろうとくる前からわかっていた。夜中の1時ころから雨と風が強くなった。●f55／雨が吹き込みシュラフが濡れた。</p>
	19時00分頃	雨／多少濡れる程度。 風／	ほとんどの人が就寝。ガイド2人(gm、gs)と女性客f54は2階で寝る。1階よりも2階のほうが暖かかったようだ。このころも雨は降っていたが、トイレに出たときなど多少濡れるくらいで、びしょ濡れになる雨ではなかったため、女性客f54は手洗いに沼まで足をのべた。濡れた衣服や装備は頭上や足上に干して寝たが、水滴が落ちてきたりした。また、濡れたシュラフに入って寝た人もいた。	
	深夜	雨／激しい雨。 風／激しい風。ピューピューと風のうなる音。	深夜2時頃がとくに風雨が激しかったことをツアー客数名が記憶している。1階は雨が吹き込み、シュラフが濡れた人も。	

7月16日 (木)	3時45分 雨／起床時は強い→断続的にやや収まる 風／起床時は強い→断続的にやや収まる	起床。起床時は風雨ともに依然強かったが、時間が経つにつれて徐々に断続的になり、やや収まってくる。この日の朝食は、朝、湯をもらい、各自持参した朝食を作って温かいものを食べる。5時出発の予定だったが、天候をみて少し待機することにし、出発を5時30分とする。glガイドが、トムラウシ山頂には登らずに迂回コースをとることをツアー客に伝えたが、天候判断による対応等の説明はなかった。ガイド側が客に問うたわけではないが、ツアー客からは異論や質問の声は出なかった。	■ヒサゴ沼避難小屋出発時の天気の印象など ●m53／夜中に強い風雨の気配を感じた。起きたときも依然風雨ともに強かったが、出発するころには断続的で、やや収まったような感じ。特に不安はなかった。●m52／どちらかというより風が気になる感じだったが、最終日だし出発すると思っていた。出発予定の5時前、トイレから帰ってきて、横で寝た男性客m31に「出発が30分のびたと聞いた。」●f54／起きたとき雨はひどくなかった。どちらかという気になるのは風のほう。出発するときも同じような天気(8月時点)。こんな天気に行くのかしようがないとも思ったが山では我ままは言えない。予定どおり帰りたいかと聞かれたら、帰りたいと答えたと思う。●f55／個人的には1日停滞しても、キャンセル費用はかかるが命には代えられないと思った。●f41／できたら避難小屋でもう1泊したいと思った。それなりに不安はあったが、glガイドが「僕たちの今日の仕事は山に登ることではなくて皆さんを無事に山から下ろすことです」と言ったので安心した。私は1日ずらしてもいいと思っても、他の人の予定を考えたら難しいことだと思う。●m51／トムラウシは2度目。上部が吹きさらしになるところは知っている。前の晩の状況から考えたら、出発すること自体に無理があると感じた。そうとう風が吹いていたから、上はもつとすごいだろうと思っていたが予想通りだった。一番望ましいのは出発しなかったことだと思う。
5時30分	雨／強弱にむらがあるが、ひどくはない。 風／強弱にむらがあるが、ひどくはない。	出発する。出発時、何人かの客は出発することに不安を感じていたという。一方、出発時には風雨が少し収まったので、不安感がなかったという人もいる。ガイドは、10人用テント1張、4人用テント1張、炊事用具、燃料などの今山行に必要な共同装備を、沼ノ原から登ってくる自社ツアーのために小屋にデポして出発する。※「デポ」とは、長期山行や後の積雪期山行のために、事前にルート上の避難小屋などに食糧や燃料を荷上げておくことだが、現山行に必要な装備をデポすることは通常ではありえない。また「デポ」に人を配する必要はない。	
5時45分頃 雪渓	雨／弱い 風／アイゼンの装着場所は地形的にだろうが風は弱い。	出発後の雪渓手前で今山行で初めてアイゼンをつける。アイゼンをつけた人から歩き出す。装着に手間取る客たちにはシェルパがアイゼンをつけてまわる。また雪渓歩きのためにシェルパはスコップで雪渓に足場を作った。先頭を歩くgmガイドが振り返り立ち止まった後に、雪渓を下りていったので男性客m52が振り返ると、雪渓下部のほうに女性客と男性2~3人が集まっているのが見えた。シェルパは空身で雪渓上部まで同行し、沼ノ原から登ってくる自社ツアーの場所取りやデポした装備の管理のために雪渓上部から避難小屋に戻る。ここからツアー客15人+ガイド3人になる。※「デポ」とは、長期山行や後の積雪期山行のために、事前にルート上の避難小屋などに食糧や燃料を荷上げておくことだが、現山行に必要な装備をデポすることは通常ではありえない。また「デポ」に人を配する必要はない。	



↑上の写真は3点とも日本庭園付近の風景。左2点の写真は、前日登らなかつた化雲岳の「化雲のヘソ」と呼ばれる大岩が遠くに見える。右写真はトムラウシ方面。遠くポコポコとトムラウシ山頂が遠い。

6時10分
稜線(ヒサゴ沼分岐)

雨／弱い
風／稜線は風強い。

6時10分頃、稜線にあがると風は強くなったが、歩けないほどではなかった。この時点では通常の参考タイム30分のところを40分で避難小屋から稜線へ登る。登山道は前日ほど水浸してはない。

■何を着て出発したか

●m52／初日(上記参照)と同じ服装に上下雨具。強風地帯に差し掛かる前、行動中にフリースを着た。雨具を脱いだときに服が濡れてしまうのが嫌だったが、着たことで体が楽になった。●f54／濡れたシャツは着ないで、着替えた服装で(ポリ100%の山用長そで)。フリースを濡らしていたので着られず、温泉宿でもらったタオルに首が入るように切れ込みを入れてかぶり、ウインドブレーカーを着て雨具。●f41／昨日濡れて脱いだものは着なかった。着替えを丸一式持参していたので、サポートタイツも替えをはき、初日と同じ服装に上下雨具。北沼をわたる前、前がつかえていて動かず、理由もわからずに待たされていた行動中(徒渉時間だと思う)に風雨の中フリースを着た。ザックの上の方に入れておいたので出しやすかった。中の方だったから、風雨の中で出せなかったのではと思う。●m51／北沼の前の休憩でダウンジャケットを着た。

天沼→日本庭園

雨／風とともに雨脚強まる。風の影響もあるだろうが、雨が素肌に痛いほど。風／次第に強まり、立ってられないほどに。風速毎秒20mだったといわれている場所。静岡パーティーの女性(69歳)は17kgを背負っていて転がった。北沼のある台地手前の登りは体をもっていられるような風ではなくなった。

天沼手前で5分ほど風の当たりにくい岩陰で立ち休み。休憩後歩き出したが普段の休憩の間隔よりもかなり早い段階で、再び天沼付近で休憩を取る(前日までは休憩の声かけはgmガイドの判断で行っていたがここではgガイドのgmガイドへの声かけだったという)。しかし、休憩を開始後すぐに大粒の雨が降り出し、休憩を切り上げて歩き出す。天沼を過ぎるころから園からロックガーデンまで風速毎秒20mといわれる強風にまともに歩けず、立ってられずに転ぶ人が続出する。先頭をゆくgmガイドの声が全員に届かない。真ん中あたりにいたgsガイドが「風が強く吹いたらしゃがんで」「風の息を読んで進んで」「横向きに歩いて」などを繰り返した。このあたりから客の歩行状態にばらつきが出始める。日本庭園からロックガーデンに向かう木道、木道が終わる前あたりの風が一番強烈な風として記憶している人が多い。

■出発時～北沼あたりまでの印象

●m52／とにかく風が強かったのは日本庭園からロックガーデンのあたりの木道のある場所。●f54／朝一番の雪渓後の岩場の登りだったように思うが(ロックガーデンの登りではなかったかも)、m31の足がもつれて何度も倒れるので支えた。私の体力がもたないと思い、gガイドに任せた。日本庭園あたりの木道の風がすごかった。しゃがんで木道の端をつかんでいた。風が少し弱まったときに横移動した。北沼は水面が波打っていた。●f41／稜線に出てから風雨が強くなり、吹き飛ばされそうなきはしゃがんだ。トムラウシに向かう途中の登りでは、水が勢いよく流れてきて沢登りをしているようだった。いちばん風が強かったのは日本庭園あたりの木道のところ。ロックガーデンあたりでの休憩場所は坂の途中、岩の手前だったような気がする。静岡パーティーがgさんに何か尋ね、挨拶をしていた。私はバナナを食べることができたが休憩時間はとても短かった。この先は北沼の徒渉を終えるまで休憩をとった記憶がない。なぜ進まないのかわからず、「今は何の時間かな?」と思いながら長く待っている時間はあった。そのときフリースを出して着た。徒渉の待ち時間だったのだと思う。

8時30分頃
ロックガーデン

ヒサゴ沼からロックガーデンまでの通常の参考タイムは1時間30分ほどだが、倍の約3時間かかる。ロックガーデンが終わった先の登山道の沢地の窪地で風を避けて休憩する(「中間報告書」より)。また、この休憩は遅れている人を待つ意味合いがあったのではないだろうかという見方も参加者の中にある。ツアーの200mほど後ろを歩いていた静岡パーティーは、「真冬のような寒さで体力を消耗する。ツアーのペースではやばい、時間的にもまずい」とロックガーデンの途中で休んでいるツアーを追い越す。静岡パーティーはこの時間を9時頃ではと記憶している(7月20日時点)。ロックガーデンの上の広い平地で風がまた強くなる。※また中間報告書には、「ロックガーデンの登りで男性客m31は、脚を空踏みしてふらつき、しばしば座り込む」という内容の女性客f54の発言があるが、その後改めて思い出してみると、その場所は強風だった木道地点よりも前にだったような気がする。そうだとすると、日本庭園にさしかかる前に、すでにペースについて行くことができなくなった人がいた、ということになる。



↑左写真は稜線からみたトムラウシ。たおやかで大きな山並みが見つく。 中写真はロックガーデンあたり。 右写真は、ロックガーデンのひと登りを終えてこの長い道のりの先に北沼、山頂がある。

10時00分？
10時30分？
(時間不確定)
北沼徒渉点

雨／霧雨のような、濃いガスのような雨。
風／強さが一定ではなくムラがあったのか、時間的な違いか、徒渉時に徒渉地点の流れが波打っていたという人と、そうではなかったという人がいる。
各個人の待機場所によっても違いがありそうだが、雨具がバタバタイうほどではない風。かと思えば、gsガイドは

通常の参考タイムはヒサゴ沼から2時間30分であるが、約5時間あまりをかけて北沼に到着する。降雨により北沼からあふれた水が幅2mほどの川となって登山道を横切っていたため、パーティーのうち何人かが流れの真ん中に立ったgmガイドやgsガイドの助けを借りて流れをわたる。女性客がふらついた拍子に、gsガイドは転倒して全身を濡らす。そのことに「お客様を支えているときに風で体を持っていかれた。お客様がふらついた拍子に後ろに飛ばされたわけだが、自分のザックが大きかったから風の抵抗も強かった。最大のミスで一気に体温が下がっていった」というコメントが中間報告書にある。徒渉に躊躇する女性客もあり、gmガイドが少しでも渡りやすい場所を探して徒渉させるなどする。遅れていた3人のメンバーをglガイドとgmガイドがサポートし、全員が渡り終える。またgsガイドは、その後に動けなくなる女性客f11がわたる前に全身を濡らしている。この徒渉点の通過にかなりの時間を要した(30分～それ以上)。

■北沼徒渉時の様子や待ち時間の様子
●m52／列の真ん中あたりにいた。渡るときの水位は20cmくらい。靴の上部から水が入ったのを感じた。トムラウシの斜面から滝のように北沼に水が流れているのが見えた。●f54／列の最後を歩いていたら前が進まず、待っていて冷えてしまうよりは素早く渡ってしまおうと、列の横を抜けて渡った。水位はひざ下。流れがあった。北沼が白く大きく波打っていた。徒渉後、その先で休んでいたが、奇声を発する人もいた。待ち時間に風で飛ばされたザックカバーを拾ってくれたglガイドは「誰のですか」と声を出すこともなく、またすぐに飛ばされたりして、普段と様子が違う感じだった。●f41／どちらかという列の後ろの方だった。足のくるぶしくらいまで水につかって渡ったと思う。ゴアのスパッツを着用していた。gmガイドにしがみついて渡った。gsガイドはf11が徒渉する前には転んでいた。●f23／徒渉後に立ち止まった所で体が一気に冷えた。パーティーの後方にいたので休むスペースがなく、少し離れた所で腕で押さえても止められないほどがたがたと全身が震え、歯ががちがち鳴った。●f55／北沼では猛烈に寒く、体が勝手に震えて止まらなかった。あまりの寒さに、昼食後雨具の下にレスキューシートを巻きつけた後は全然寒くなかった。(シートを巻いた昼食の場所を確認したかったが連絡取れなかった)。●下写真は北沼巻き道からの北沼徒渉点↓

10時30分？
11時00分？
11時30分？
12時00分？
(時間不確定)
北沼徒渉点→北沼分岐
※北沼徒渉点から北沼分岐は5分ともかからない

“ツェルトが巻けない”風という。待ち時間中、ほんの一瞬だけ空が明るくなったと記憶している人も。風はあったが強風であつたら1時間以上待ってられないとの声も。みな待つ間に体がどんどん冷えて、寒くなっていったことには変わりはない。

徒渉を全員終え、行動を開始しようとする女性客f11がぐったりとし、行動不能となる。gsガイドが温かい紅茶を飲ませるなどして介抱するが、ガイドの声にも反応はほとんどなく、声も出なくなる。ガイドたちは女性客f11にかかり切りのような状態になり、ツアー客は風雨の中、待つことになる。小さな岩陰などに各自ばらばらに座り込んで待っている客の中から「寒い寒い」という声が出る。ガイドから指示もなく動く気配がないので、男性客m52がどうするのかglガイドに聞きに行くと、様子を見るという。女性客f32が嘔吐し(何も出ない)、奇声を発しはじめるが、その後も指示も動きもなく、周囲の状況を見てm52は「このままではよくない」と誰に言うともなく大きな声を出して一喝し、「早く救助要請をすべきだ」と口にした。男性客m51がgmガイドのザックを持ち上げて行動を促すと、gmガイドはm51の顔を見てからglガイドのところに向いた。この待機時間は北沼の徒渉待ち時間含めて、1時間なのか？1時間半なのか？それ以上なのか、不確定。(自力下山者の下山後すぐの報道に「1時間30分ほど待っていた」という記述はあり。)



風／ツェルトが巻けない状態の風。→そんな風の通る付近にツアー客を待機させていたのか？

客らの声に、glガイドのところに行ったgmガイドは、歩ける人だけで先行すると言った。動けなくなった女性客f11にglガイドとgsガイドを付き添いに残して(ビバーク▲I)、本隊は移動する。男性客m21は持参していた個人所有のツェルトをガイドに置いていく。そのツェルトで女性客f11を包んでさすっていたglガイドに「俺が看るから」と言われ、gsガイドは本隊を追い越すことにしたという。このときの風をgsガイドは「風が強いのでツェルトを巻こうにも巻けない状態(中間報告書より)」と話す。

雪渓の上に出てgmガイドが人数を確認すると客2名が足りなかったが、列の中ほどにgsガイドが戻っていた(gsガイドは自分が列に戻ったことをgmに伝えなかった、また歩けなくなった2名の客を追い越してきたのか？)。gmガイドは、少し先に風がしのげる場所があるので本隊はそこで待つようにgsガイドに指示する。gmガイドは北沼分岐に戻り、残っていた女性客f22とf23の2人を背負い、何回かピストンして運ぶ。雪渓を登り切ると行動不能の女性客f24と介護している男性客m21がいた。gmガイドは、2～3分先で待っていた本隊に追いつき、協議の結果、行動不能な女性客f22、f23、f24、付き添いにm21がgmガイドとここでビバーク(以下▲II)、gsガイドは本隊(以下◆)として10名の客を連れて下山することになる。gsガイドがgmガイドに対して「いちばん元気なのはお前だよ」と答えるのを前のほうにいたm52とf54が聞いている。gsガイドは2人で論じている余裕はないと出発にかかる。gmガイドはgsガイドに、分岐などでは点呼をとるように、10名のお客様に責任を持って下山させて、と話す。

■中間報告書に寄せられていたガイドのコメント
●gm／詳しい話の内容は覚えていないが、その先のルートを知っているのは自分なので、僕が歩行可能なお客さんをまとめて前進した方がいいのではと迷ったが、gsガイドとの話し合いの中で、やはり自分が残った方がいいと感じた。彼は自分のダメージについて話さなかったし、僕もまさかそんな状態とは知らなかった。後で話を聞いて思い返してみると、gsガイドはここでビバークできるような状態ではなかったのかなと思う。●gs／「10人連れて行ってくれ」と言われたが、この時点で僕も低体温症の症状が出ていて、道も知らないし、正直言って自信なかった。この中で一番体力の残っている彼の方がいいのではと思ったが、2人で論じている余裕もないし、最終的に彼の指示に従った。●gm／当然迷いはあったが、混乱とかパニックという状態ではなかった。あのような状況で混乱やパニックが一番危険ということはわかっていた。ただ、選択肢がいろいろあり、優先順位もあったので、そういう意味での混乱はあった。

北沼分岐→行動を開始	雨／ほとんど止んでいない。視界はきかない。風／弱い。地図がハタハタとはためくらしい風	◆gsガイドと客10人はトムラウシ山頂を西側のルートから巻いて下山を開始する。歩きはじめるとgsガイドが立ち止まり、引き返そうとする。その瞬間「地図を借りに戻るんだ」と思った女性客f41は、これ以上待たされるのは嫌だと思い、「地図なら持っています」と声をかけ、ザックを下ろして登山地図を渡す。「こっちであっていた」というようなことをgsガイドは言って地図を返す。見ていた女性客f54は「お礼も言葉かけもなく放りなげるように地図を返していた」と話す。地図を出したf41はザックを下ろして歩いて歩ける状態ではなかったが、本隊が歩き出してあせる。f41は「gsガイドが地図を持っていないわけではないだろうし、返し方も普通ではないし、もう軽い低体温症にかかっていたのでは」と振り返る。	◆歩きはじめてのち、f54は風が弱い大岩の陰での休憩をとらないかとgsガイドに呼びかけたという。そのときの様子を、「みな行動食をとるなどしていたが、f32が嘔吐し(何もでない)、意味不明の言葉を話し出したので『なにか食べないと、まだ歩くのよ』などと言うと、急に我に返ったようになにかを食べはじめた」という。大岩の場所は、沼を過ぎた少し下、雪渓の前だったような気がするが後だったかも知れない、と確定まではできない。また、左欄記述の地図のやりとりの前だったような気もするが、いろんなことが断片的でよくわからないと話す。しかし、f41は北沼の長い待機時間に降にみんなで休憩をとった覚えがないという。また、北沼の待機時間にf32が嘔吐し(何もでない)、奇声を発していたことは記憶している。この件を(この件だけではないが)、m51、m53、f55に話を聞くことはかなわなかった。 ↑この「休憩」は、左欄2つ上の下線部のことと関連がありはしないだろうか。
▲Ⅱ 北沼分岐付近		▲Ⅱ 北沼分岐付近でピバークを決めたgmガイドは、男性客m21に手伝ってもらってマットを敷き、女性客3人(f24、f22、f23)を寝かせる。持っていたツェルトでは5人が入りきらないため、ツェルトを被せるようにする。添い寝をするためにgmガイドも入り、体をさすり保温につとめる。女性のなかには泣き出ししたり、大声で叫んだりする人もいた。	
13時30分頃？ 北沼分岐後？南沼 キャンプ場手前		◆歩きはじめてしばらくすると本隊は、gsガイドと女性客f54、男性客m51のいる前よりの集団と、後ろの集団の2つに分かれはじめる。gsガイドは振り返り、ペースに着いていけなくなった客に「ついてこなきゃダメだ」「早く来い」と怒ったような口調で言葉をかけるが、そろりまで待つことはなかった。トムラウシ分岐に到達する前の段階で、すでに本隊の列は長くなっていた。この時点ですでに男性客m53は後続の男性客m31がいないことに気づき引き返していたようだ。男性客m53が引き返すとm31が直立不動で立ち止まっていたため抱えて歩かせ、ほかの客たちを先に行かせ、歩かせようと試みるが左右の区別もつかなくなる。平らな場所でもしゃがみ込むようになり、南沼キャンプ場5分ほど手前あたりまでできたが立ち上がれなくなる(8月7日「トムラウシ山の遭難事故の経過について」より)。	←m51の記憶では、gsガイド、f54、m51、女性(f32?)、となっている。m52の記憶では、gsガイド、f54、m51、m52、となっている。事故直後の新聞報道にもその順番の記述があった。中間報告書では、gsガイド、m51、f54、m53、の順番で歩き出したと書かれている。f54に聞いてみると、gsガイド、f54、m51、その後はよくわからないという。参加者が下山後の報道によってお互いの名前を認識している状況をふまえて、雨風で雨具の帽子を深くさぶり、ガスで視界もきかず、ましてや極限状態のなかでは、目立つ行動や言動、目立つ色の雨具やザックカバーで相手を覚えていることも多そうだ。
		◆男性客m52が自分が列の最後尾になろうと思いがちだった時点で、みんなのペースはあきらかに落ちていて先行者について行かれなくなっていた。女性客f55はすでに女性客f33をサポートしていた。2人確認できず(m53・m31)、さらに登山道を少し戻ってみるが見えなかったため男性客m52は女性客らの後ろにつく。女性客f55にf33のサポートを頼まれたm52はf55とともに、体を支えたり抱き上げたり交代であたる。前を歩いていた女性客f32が立ち上がれなくなったのでf55がサポートにまわり、f33のサポートをm52がする。雪渓(m52はトムラウシ公園の手前の雪渓ではないかと記憶)では、f33を座らせて杖をもたせて引っ張るなどする。一向に進まなくなり、自分のできる範囲を超えていると思ったm52は、先に進むことをf55に伝える。すぐ先には女性2人(f41とf34)がいた。f41はf34より幾分体力が残っているかのように見えたがやはりよろめいていた。m52が声をかけたがf41は「一緒にいる」といった。f41はf34の名前を下山後の報道で知る。f55はf33のサポート中、岩の上に立ったときに、どんどん先に進むgsガイドを見る。	■静岡パーティーの新聞等へのコメント 5時35分に小屋を出る。出発時ツアーの200mほど後ろを歩いていたが、「ツアーのペースではやばい」と危険を感じる。「私たちは前日に体力を温存していたが、真冬のような寒さでは体力が消耗する。山頂手前の岩場(ロックガーデン)あたりで時間的にもまずい」と、9時頃ツアー一行が休憩中に追い越した。 17kg背負っていて飛ばされた女性(69歳)は、「ツアーの女性は足がすくんで動けないようだった」と話す。静岡パーティーが通るときの北沼は、海原のように波うち、風で飛ばされた水しぶきが吹き付けてきて、立ってられず、四つんばいで進んだ。体調の悪そうな人はいなかった。装備もしっかりしていて初心者には見えなかった。風は稜線に出るとひどくなった。構えないと歩けないほどだった。屋ごろ一時的に晴れ間も見えたが、前トム平付近で風雨強まった。避難小屋でガイドたちが「今日の午後には天候は回復するだろう」と話していた。
		◆男性客m31が意識をなくしたあと、歩き出した男性客m53は、まっすぐ歩けなくなった女性客f33、f32をサポートするf55に追いつき(南沼キャンプ場の先ではないかと記憶)、サポートを頼まれる。f55は救助要請に急ぐというので行かせる。f32はぐったりしており、f33は奇声を発する。	■トムラウシ温泉から登ってきた他ツアーの新聞等へのコメント 午前9時ごろ、前トム平付近に着き、風を遮る木がなくなったら強風が吹き始めた。カッパが風を受け、ばたばた激しい音をたてた。雨は強風で細かい粒になってうねり、白いカーテンのようだった。風の通り道に差し掛かるとさらに強烈な突風が。リュックを合わせて100キロほどある添乗員の体を持ち上げそうになるほどで、上体を起こすと体が振り回された。3人ほど風で横に倒れ、全員が自然としゃがみ込んだ。この時点で登山ガイドと添乗員が話し合っ「無理」と判断。追い越していく登山客もいたが下山を決断した。
トムラウシ分岐		◆gsガイドは、昼食後トムラウシ分岐まで15～20分ほどで着いたと記憶、また立ち止まって振り返ったところ、列がばらけていて彼の見る限りでは8人しか来ていなかった、2人のために引き返すだけの余力が体力的にも精神的にももうなかった、という(「中間報告書」より)。後ろをついていたf54をふくめ、客は点呼を聞いていない。※“昼食”とはいつの休憩？待ち時間？をいっているのか。	

巻き道から北沼徒渉点を見る→



		<p>◆男性客m53は女性客f32とf33の介護を続けたが、その甲斐なく意識をなくしたのでその場を離れる(「トムラウシ山遭難事故の経過について」には13時40分と記述あり)。さらにトムラウシ公園に向かって行くとシュラフに包まれた女性客f34と付き添うf41と会う。f41に声をかけたがこの場を離れたいと話し、無理強いせずm53は下山を続ける。f41はf34についていたときに、m53やm52に声をかけられた記憶がとんでいるという(2月現在)。しかし、自力下山直後は「2～3人のツアーの方が『救援をよぶから』と追い越していきました」とコメントしている。</p>
15時00分 前トム平	雨／あがっていたが霧で視界は悪い。 風／弱まっていた。	<p>◆本隊のうちgsガイドと女性客f54が前トム平に到着。gsガイドが後続を気にする様子はとくにない。雨は上がっており、風も弱まっていたが霧で視界が悪かった。女性客f54はこの前トム平以降、地図をみても現在地がどこか分からなかったという(f54は読図の経験がほとんどない。前トム平には立派な標柱あり)。</p>
15時54分 前トム平下部 * 今山行初めての救助要請		<p>◆前トム平からコマドリ沢分岐に向かう途中、岩場などでgsガイドが何度か座り込んだのでf54が「あなたも子どもがいるんでしょう。頑張りなさい」などガイドを励ます。15時48分、f54の夫から彼女の携帯電話に着信があり、電話が通じることがわかる。gsガイドに頼まれてf54がこの山行で最初の110番通報を15時54分に行う。警察に現在地を聞かれたが答えられなかったためgsガイドに代わったが、ろれつが回らない状態であった。gsガイドは、ツアー会社名や自身の名前等を名乗ることはなく、自分のことなのが「ポーターです」という言葉を何度も口にする。携帯電話の電池が会話の途中で切れては電池を暖めてを3～4回繰り返す。完全に電池が切れた後、gsガイドが「じゃあ自分の携帯を出す」といってザックを下ろして取り出す。持っているならもっと早くになぜ電話しなかったのかf54はあきれけるが、警察に電話をするのだと思っていたgsガイドは、誰と話すわけでもなく、ハイマツの上に置いたザックに寝そべって指で番号をずっと打つ(メール?)。f54が「早く警察に電話をかけて」と何度も言う。追いついたm51が、「ザックを下ろして助けに行くか、救助要請に行くかどちらかにしなさい」など言うが、gsガイドはハイマツにひっくり返って動かない。m51とf54はガイドに声をかけて2人で下山をはじめめる。</p>
時間不明 前トム平付近		<p>◆トムラウシ公園を過ぎた後、男性客m52は道を見失う。道を探し出したところでビバークを考えていると、女性客f55が下りてくる。f55は、ビバークしないで下りようと言い、2人で下りはじめる。その後、前トム平に上がった後m52は、自分のペースが遅いのでf55に先に行ってくれと伝えて別れる。</p>
16時～18時前頃		<p>◆トムラウシ公園手前では、女性客f41が自分のシュラフをかけてあげたf34が冷たくなり、座っていたためか自分の体力は回復していたので下山を考える。しかし、いまから下りてもすぐに暗くなり、道迷い等懸念されるため、ヒグマが気にはなつたが登山道から5～10mほど入った草むらでビバークを決める。f34の荷物からシュラフを出して彼女にかけなおし、早朝の下山に備えて自分のシュラフとマットに横になる。</p>
16時49分前▲Ⅱ 北沼分岐 * ビバーク組からアミューストラベルを経由して救助要請		<p>▲Ⅱ 13時頃に、gsガイド率いる本隊と分かれたビバーク組のgmガイドはツェルト内が落ち着いたのち、南沼キャンプ地に向かう。登山者がいたら救援を頼めるかもしれないということ、南沼付近で電波が通じるという話をきいたような覚えがあったという。電波が入る場所からアミューストラベル社に、「すみません。7人下山できません。救助要請します。トムラの北沼と南沼の間と、北沼の2カ所です」といった内容のメールを16時49分に送信する。その先少し歩くとm31がうずくまっていたが脈はなかった。さらに先に青いビニールシートの塊があり、中にテント、毛布、ガスコンロを見つける(登山道整備業者が非常時用に残していた装備品)。gmガイドは倒れていたm31に毛布をかけてビバーク地へ戻る。また、17時過ぎには、「すみません8人です。4人くらいだめかもしれないです。gさんも危険です」とメールをする。</p>
17時00分前後		<p>◎15時54分の110番通報を受けて道警ヘリコプターによる捜索を開始するが、悪天候による視界不良のために40分ほどで捜索を断念。◎印は捜索に関する動き。</p>
		<p>◆男性客m51、女性客f54と別れたあと、gsガイドは意識がはっきりしないまま下降し、前トム平下部、巨岩のトラバース帯のそばのハイマツの中に倒れる。その後、下りてきた女性客f55が途中のハイマツの上に大の字で寝ているgsガイドを見つける。</p>
17時00分～ 17時21分 前トム平下部		<p>◆男性客m52が下りてくると、雪溪の下にf55とgsガイドがいた(17時過ぎだったと記憶)。f55はgsガイドに「あんたガイドなんだから倒れていないで警察に電話して！上まで弱っている女性たちのためにテントを張って！」と叫ぶがガイドの反応ははぶく、動作も遅かった。追いついたm52は、「あんたは客ではないのだからガイドとしての仕事をしてもらねば困る」と言って、ほとんど立ち止まらずに1人で下りていく。その後、f55は「目の前で電話をして！」とgsガイドに言い、警察へ電話を入れさせる。発信履歴による最初の通報は17時21分。</p>
18時00分頃▲Ⅱ		<p>▲gmガイドは拾ったテントを男性客m21に手伝ってもらい、一段低い平地に立てる。マットの上に女性3人を運び入れるが、f22が危険な状態に見えた。声に反応があったため急いでガスコンロを点ける。もう一度声をかけたが反応がないため、gmガイドが20分ほど心臓マッサージをしたが意識は戻らなかった。</p>

■その他ツアー参加者の声

●m52／下山している間、ずっと腹がたっていた。『責任をもって下山させて』とgmガイドに任されたgsガイドは男女2人の客と先に行ってしまった。女性たちが遅れても、まったくサポートしなかったのです。おかげで散り散りになってしまいました。●m51／スタート時点からの間違いの積み重ねはあるにしても、今回の件でいちばん問題だと思うのは、3人のガイドの意思疎通が欠けていて、後続者が来るまでほかの参加者を最も寒いところで待たせていたということだろう。北沼の横を通り過ぎたあたりまで行けば、多少風がやわらいでいた。少なくとも北沼を渡ったところで待つことはなかった。

コマドリ沢下降点		◆女性客f55が上の女性たちのところに戻ろうか下ろうか思案していると男性客m53が下りてくる。m53にかなり下りてきていると聞き、ヘッドランプを点けて2人で下りはじめ。
18時00分頃か コマドリ沢分岐		◆男性客m52はコマドリ沢を渡ってからヘッドランプを出して歩く。
		◆女性客f54、男性客m51は、カムイ天上の少し手前でライトを点ける。
18時？分頃▲Ⅱ		▲女性客2人にお湯を飲ませたり、抱きかかえて保温に努めていると2人の状態が落ち着いてくる。男性客m21に火の番をお願いし、飲料水確保のためgmガイドは南沼の水場に出かけ、デポ品の中から新たにガスコンロ、ボンベ、毛布を出す。途中、携帯の電波が安定している場所からアミューズトラベルの堀田所長に電話をし、状況を説明。16時38分のgmからのメールと前トム平からの通報を受けて、現地警察が動いていることを確認する。
19時10分頃▲Ⅱ	晴れ／空は明るくなり、 月明かりもある。	次にアミューズトラベル本社の松下社長と話す(19時10分)が、直接、新得警察署と話をしてくれ、とのことで警察と何回かやりとりする。その際、女性客らが意識不明などの状況や生死不明の男性1人が近くに倒れているのを目撃したことも伝える(翌日発見された単独登山者のことか)。警察から「対応を協議後に連絡する、電波の届くところで待っていて」と言われてキャンプ場近くの岩陰で毛布にくるまって待つ。20時くらいまで電話をする。すでにあたりは暗く、ヘッドランプを持って出なかったgmは手探り足探りでテントに戻る。
20時30分過ぎ▲Ⅱ		▲Ⅱ 男性客m21にテントをあずけてからどのくらい時間がたった後か、gmガイドがテントに戻ると、20時30分頃にf24が意識不明になったとm21から聞く。10分ほど心臓マッサージをするが意識は戻らず。しかしf23は体力が回復しており、m21と行動食を食べていた。寒かったf23はダウンを着、gmが貸してくれたレスキューシートを使う。南沼では水が汲めなかったため、gmガイドは北沼の雪渓に汲みに行く。夜はgmガイドと客m21で交代に火の番をしながら、3人もひざを抱えて座り、うとうとして朝を待った。
時間不明		◆歩いていたm52の前にヘッドランプの灯りが2つ見え、救助隊だと思い、「私はアミューズの参加者です」と声をかけると下山してきたf55、m53であった。道を逆行していたと知り驚く。ここから3人で下るが、2人のペースが速かったため、短縮登山道分岐付近でm52は別れる。
22時00分▲Ⅱ		▲Ⅱ 新得署と決めた定時連絡時刻だが、ビバーク中のgmガイドから新得署への連絡はなし。
22時15分頃		◎救急車が短縮コース登山口に到着する。
23時00分頃		◎▲Ⅱ 新得署からビバーク中のgmガイドに電話を入れるが、電波不良のためか不通。
23時45分頃		◎新得町が北海道を通じて正式に自衛隊へ救助要請をする。
23時50分頃		◆m51、f54がトムラウシ温泉コースを自力下山、林道に出たところを車に拾われ短縮登山口へ。
7月17日 金		
00時55分頃		◆m53、f55がトムラウシ温泉登山口に自力下山。2人は、途中は3人で下山したが途中で離れたと話す。
1時10分		◎自衛隊員が新得署に到着する。
1時30分		◆m52がビバークをきめ、マットに寝転がりシュラフカバーに入る。
3時30分		◆下山をした女性客らからツアー客が離れ離れになった様子が語られはじめる。
3時53分		◎警察、消防署員の各3人計6人が短縮コース登山口から合同捜索を開始する。
4時00分前▲Ⅱ	無風快晴	▲gmガイドが第1ビバーク地を見に行くと、glガイドと雨具上下を着たままの女性客f11が倒れていた。風で飛ばされて近くの岩に引っかかっていたツェルトだけ回収して戻る。※『gmガイドが、glガイドとf11のビバーク地点まで様子を見に行くと、ツェルトに入っていたf11とglガイドは絶望的な状況であった』という初期報道は中間報告書にはなく、朝4時前に見に行ったとある。お互いのビバーク地点が近いのにガイド同士で連絡をとろうと思わなかったのか、南沼でテントやコンロを発見後にツェルトビバークのglらに声をかけなかったのはなぜか。
4時00分		◎道警航空隊、自衛隊のヘリコプターなど3機が捜索を開始する。
4時30分頃	晴れ	◆ビバークしていたm52が起き、歩き出す。
4時38分		◎道警ヘリが前トム平で意識不明の女性客1人(f32かf33)を収容。
4時45分頃		◆m52がトムラウシ温泉登山口に自力下山。その後一般の車に拾われる。
5時01分		◎道警ヘリが前トム平で意識不明の女性客1人(f32かf33)を収容。
5時16分		◎道警ヘリが前トム平付近で自力歩行が可能なf41、さらに意識不明のf34を発見、収容。
5時35分		◎道警ヘリがトムラウシ分岐付近で意識不明のm31を収容。

5時45分		◎道警ヘリが北沼西側付近で手を振っている2人、倒れている2人を発見する。
6時31分		◎道警ヘリが南沼キャンプ場付近で寝袋にくるまっている意識不明の男性1人を発見。
6時50分		◎陸上自衛隊ヘリが、自力歩行が可能なgmガイド、男性客m21、女性客f23、と、意識不明のgガイド、女性客f11、f22、f24を収容する。
9時36分		◎陸上自衛隊ヘリが南沼付近で単独登山者の男性(64歳)の遺体を収容。
10時00分までに		◎単独行者含む9人の死亡を確認。午前6時頃から相次いで遭難者(計7人)が搬送された十勝管内清水町の清水赤十字病院の医師らによると、「遭難者はいずれも下着まで濡れて、体は冷え切っていた。7人全員が足などに複数の青あざがあり、強風にあおられて岩場で転倒したのではない」、また「最初に搬送された男性には強心剤投与や心臓マッサージなど20分ほど治療をほどこしたが、蘇生しなかった」と25日付けの北海道新聞にコメントが掲載された。
10時44分		◆最後まで行方がわからなかったgsガイドが登山者により発見され(前トム平下部のハイマツの中)、110番通報される。意識はあり、自分の名を告げる(救助隊が探し歩いていたときはどうしていたのか)。
12時00分		◎道警がすべての捜索活動を終了
(★14時00分～)	★ツアー計画予定	(予定では、新千歳空港14:00発仙台行きをはじめに、広島行き、中部国際空港行きに乗り込み、アミューズトラベル社ツアー一行は、帰路につくはずであった。)
7月18日(土)		司法解剖の結果、ツアー客7人とTガイドの死因はいずれも低体温症による凍死と判明(単独登山者は司法解剖せず)。死亡推定時刻は遭難翌日の17日未明だった。

写真提供＝鈴木恵美子(女子美術大学WV部顧問)、高桑信一(ろうまん山房)

この表は、2月時点の報道(岳人、山と溪谷、中間報告書、アミューズトラベル社「トムラウシ山の遭難事故の経過について」、北海道新聞、十勝毎日新聞、中日新聞、東京新聞、朝日新聞など)と生存者への取材をもとに「岳人」編集部岩城が作成

7月17日 朝刊 ■毎年、ガイドに対する研修を実施。「今回のツアーガイドは、わが社にとって最強」と話す。

7月18日 朝刊 ■2004年と2008年に別の山で二件の滑落事故が起き、2人が死亡している。

アミューズトラベル社の「魅力の大縦走 大雪山系縦断の満喫コース／旭岳からトムラウシ山縦走」(152000円)のツアーという受け皿に集まった19人。152000円×15人＝2280000円

このガイド(4人)と参加者(15人)は、「アミューズトラベル社のもとに集まった19人」だ。

ツアー登山は、①ツアー会社があり、②ガイドがいて、③参加する客がいて、成立する。

ツアー登山を考えると、①ツアー会社、②ガイド、③参加する客は、トライアングルを描く間柄なので、別の言い方もできる。

例えば、③参加する客がいるから、①ツアー会社ができ、②ガイドを頼んで、成立する。などである。

持ちつ持たれつの関係だが、①客からお金をもらう側、②ツアー会社からお金をもらう側、③ツアー会社にお金を支払う側と、立場に大きな違いがある。

※2007年までアミューズトラベル社でガイドを請け負っていた方の当時のガイド料は 11500円/日。命をあずかる仕事だが、この価格は破格ではなかろうか。

◆おわりに……

この事故は、トムラウシ山だから起こった遭難事故なのか？

「山に登るといふこと」はどういうことなのか。

2009年7月13日からのアミューズトラベル社のツアー登山で、どうして8名もの命が失われてしまったのか。

カムイミントラ「神々の遊ぶ庭」大雪山トムラウシ山に、新しい避難小屋は本当に必要なのか。

大雪山トムラウシ山が長年にわたり、登山者を惹きつけてきた魅力は なんなのか。

トムラウシ山が、いつまでも「トムラウシ山」であるためには、どうすればいいのか。山を愛する人びとが、できることはなんなのか。